『老人と海』と猫

（2002年度始業講演）

今　村　楯　夫

アメリカの作家、アーネスト・ヘミングウェイの名前を聞いたことがある、あるいは小説を読んだことのある人は多いでしょう。今日はそのヘミングウェイの生前に書かれた最後の小説『老人と海』についてお話しをしたいと思います。

物語の筋はきわめて単純です。キューバに住む一人の漁師が84日間も魚が釣れずにいたところ、老人の舟よりも大きな巨大な魚と3日3晩死闘を繰り返したあげくに捕獲し、その後で鮫に襲われ、魚は骨だけにされてしまった、という話です。

ではそんなに単純な物語が、書かれてからすでに50年を経てもなお名作として読まれ続けてきたのは何故か。日本では新潮文庫の一冊として出版されてきましたが、すでに500万部以上も出版され、さらに毎年6万部程度、出版されています。

本日の講演は「『老人と海』と猫」という奇妙なタイトルがついており、一体、この小説と猫はどう関わりがあるのだろうか、と『老人と海』を読んだことのある人は特に怪訝な思いを抱いているのではないかと思います。

そこでまず、『老人と海』の中に一度だけ猫が登場する、その場面を見てみます。

He started to climb again and at the top he fell and lay for some time with the mast across his shoulder. He tried to get up. But it was too difficult and he sat there with the mast on his shoulder and looked at the road. A cat passed on the far side going about its business and the

old man watched it. Then he just watched the road. (121)

（訳文：老人はふたたび登り出し、丘を登り切ったところで倒れた。しばらくマストは背に背負ったまま、横になっていた。起きあがろうとしたが、どうにも体が動かない。やっとのことで座ることができたが、マストは肩に背負ったまま道を見ていた。猫が一匹、はるか前方をまるで何か用事でもあるかのように通り過ぎて行き、老人は猫を見ていた。それから、ただ道を見つめていた。）

ヘミングウェイがここで描写しているのは老人の前を猫が横切って行ったと、ただそれだけのことです。うっかりすれば読み落としてしまいます。猫が一匹、道を横切ったくらいで大騒ぎすることもない、とそのまま何も考えずに読み進んでしまうかもしれません。事実、これまでこの猫の存在に注目して、その意味を探ろうとした研究者はほとんど誰もいませんでした[1)]。

その最大の原因は、この場面が物語の結末に向かう、重要な場面であり、マストを肩に坂道を登りながら倒れる姿が、単に家路に向かう悲しげな漁師を描いているという事実のみならず、その姿がまさにゴルゴダの丘を登って、処刑場に向かう十字架を背負ったイエス・キリストの姿と酷似するために、そちらの方に気がとられてしまって、他のことがかえって目にはいらなくなってしまっていたからだと思います[2)]。

1958年に『老人と海』をもとに、Warner Brothers社は、John Sturges（ジョン・スタージェス）を監督に、主人公の老人をSpencer Tracy（スペンサー・トレイシー）が演じた映画を作りました。この映画で猫がどのように登場するか、その場面を見てみます。ヘミングウェイはただ、「猫が一匹、はるか前方をまるで何か用事でもあるかのように通り過ぎて行き、老人は猫を見ていた。」とだけしか書いていませんが、それが映画で実際に映像化されている場面を見ると、原作とは随分違った形で描かれていることに気付くと思います。この1文から読者が思い描く情景が、はたして映画ではどんな風になっているか比べて見てください。

［ビデオ上映　Warner Brothers Classics “The Old Man and the Sea”］（2分程度）

映画では、分かり易く、また観客にはっきりと猫の登場を示すために、ヘミングウェイが描いたさりげない描写よりもずっと饒舌な描写となり、猫の存在が大袈裟に強調されることにより、かえって、本来ヘミングウェイが意図した意味を変えてしまっているように思われます。映画と原作の違いをお話しするのが、講演の趣旨ではないので、ちがいはこれくらいにして、老人とキリストとの関わりについてもう少し詳しく話をします。

実は『老人と海』にはキリストと重なる場面がしばしば、この場面より前にも暗示的に繰り返されております。この老人には手に深い傷を負っており、その傷はまさにイエス・キリストの磔の際に手足に打たれた釘の傷と重なります。

また、魚を釣り上げた後で、サメが魚の肉を食いちぎろうと襲いかかりますが、そのときに老人は声を発します。

> “Ay,” he said aloud. There is no translation for this word and perhaps it is just a noise such as a man might make, involuntarily, feeling the nail go through his hands and into the wood. (107)

その叫び声を作者のヘミングウェイは「あたかも、掌を板に釘で打ち抜かれたときに、無意識に発するような声だった」と表現しています。この表現はイエス・キリストが十字架に磔になる場面と重なっています。

次に魚が飛び上がる場面を見てみます。

> Then the fish came alive, with his death in him, and rose high out of the water showing all his great length and width and all his power and his beauty. He seemed to hang in the air above the old man in the

skiff. Then he fell into the water with a crash that sent spray over the old man and over all of the skiff. (94)

（訳文：魚は死の際にあって、急に生き生きとなり、水から高く跳ね上がり、そのみごとに大きく、力強く、美しい姿を見せた。小舟の中の老人の頭上高く、空中に宙づりになったように見えた。次の瞬間、水しぶきをあげ、舟もろとも、老人も、びしょぬれにさせて、水中に飛び込んでいった。）

“hang in the air” を「空中で宙づりになったように」と訳しましたが、この “hang” には、もうひとつの意味が暗示されているとも言えます。すなわち、be hanged で「絞首刑にされる」という意味です。ここでは処刑されるという意味から、あるいは魚の姿からも十字架に処せられるキリストのイメージと重なります。老人も魚も共にイエス・キリストと重ねられて描かれるということになります。

1999 年 7 月 21 日、ヘミングウェイの生誕 100 年目を祝して誕生日に限定 50 万部で Scribners 社から出版された『老人と海』の表紙です。アニメ『老人と海』から取った、魚が飛び上がって姿を見せた瞬間を描いた絵です。この場面とキリストの磔を美しく描いたテンィレットの絵と並べて見てみます。

［スクリーンにて、アレクサンドル・トドロフのアニメーションの絵と、ティントレット作「キリストの磔刑」（1565 年）により、イメージを絵画で確認］

ヘミングウェイはマカジキの死を前にした瞬間に、その美しさをたたえて描いています。イタリア、ヴェニスの画家、ティントレットは十字架に架けられたキリストを、死を象徴する悲劇でなく、深い精神力をもった勝利の象徴として描いています。

ついでにティントレットのキリスト受難に関する一連の絵画をもう1点挙げておきます。

［スクリーンにて「丘を登るキリスト」（1565年）および「丘を登るキリスト」部分拡大で確認］

刑場に向かう犠牲者たちの中にあって、超自然的な光に照らされながら、十字架の重みに屈することなく超然とした姿が描かれています。

『老人と海』にはキリストを思い起こさせるイメージの場面はいくつかあり、丘の上でマストを肩に背負って倒れている老人の姿が悲劇性を帯び、その姿に圧倒されてしまい、そのため老人の目の前を横切る猫などには、ほとんどの読者はまったく気づかずに先に進んでしまうかもしれません。

俗なる一人の老人とイエス・キリストが重なり、まさに崇高な場面で、一匹の猫が、そんな老人など眼中になく、悠然と、人間界などを超越した顔をして、通り過ぎて行きます。猫を熟知した者のみが描くことのできる猫の特性を的確にとらえ、しかもこの悲劇的な場面でさりげなく猫を登場させるヘミングウェイには改めて驚かされます。

では、どうして、ヘミングウェイはここに猫を登場させたのだろうか、この謎は今日の話の最後に明らかにしたいと思います。

本論にはいる前に、ちょっと興味深い新聞の記事を紹介します。1978年12月31日の朝日新聞に掲載された金大中（キム・デジュン）氏の獄中記です。現在の韓国の大統領である金大中氏は1973年8月8日、今から29年前に日本に滞在中にホテルから拉致され、韓国の留置所に収監されました。それから約5年の歳月を経て、獄中の体験が密かに韓国から持ち出され、朝日新聞に一括掲載されました。それには「孤独が信念を支えた――金大中氏の手記全文」と題されて、冒頭には次のように書かれてい

ます。

「獄中にあって私は韓国始まって以来、最も厳しい監視を受けたのではないかと思う。私の独房と向かい側は空き部屋にされた。私専門の看守がいて、房内の掃除や食事配達で他の人間が寄りつけないようにした。このほかあらゆる方法で私の神経を刺激して、徹底的な孤独に追い込んで、私の精神を破壊するのがねらいのようだった」。

さらに本文には次のような表現が見られます。「とくに文学はぜひ読まなければならないものだと感じた。トルストイ、ツルゲーネフ、プーシキン、ヘミングウェイなど。これらは多くの中から今日まで永遠の生命が残っている。人間の手で書くのではなく魂で書いたものだからだ……。もし、私が投獄されることがなかったなら、たくさんの真理を知らないまま死んでいったかもしれない」

金大中氏の「人間の手で書くのではなく魂で書いたもの」、「魂で書いた文学」とは一体ヘミングウェイのどの小説を指すのか、金大中氏は明らかにしていませんが、私は、それはおそらく『老人と海』を指すのではないかと思っています。実はこの獄中記の中で、続いて、牢獄を訪れる小鳥たちに声を掛け、唯一の友として、彼らの訪問を楽しみにし、それを心の支えとしていたことが書かれており、その姿が『老人と海』の老人と非常によく似ているからでもあります。

『老人と海』を見てみましょう。

『老人と海』の老人は、まったく陸地も見えず、自分の舟以外に一艘の舟も見えない大海原で、たったひとりでときを過ごしますが、そのときに舟を訪れる鳥や、あるいは自分が釣り上げようとする魚、カジキマグロに声をかけます。このカジキマグロは巨大で老人の乗っていた舟よりも大きく、ほぼ1500ポンド、700キロほどの大きさの魚（小錦の3倍位）でした。

まさに互いに命を賭けた死闘を展開させ、敵対しますが、この魚に対して老人は敵愾心をまったく抱いておらず、むしろこの魚の偉大さに尊敬の念を

抱き、愛情すら抱いています。その死闘の最中に自分と魚の区別もつかなくなってしまいます。「魚が自分であり、自分が魚である」と感じるのです。自己と他者の境界が失われてしますのです。

この自己と他者の境界の消滅は、ヘミングウェイの文学の全体に普遍的に繰り返されるテーマでして、『老人と海』以前の小説では、それは愛し合う男女の究極的な愛の次元、あるいは愛の結晶化される瞬間にしばしば描かれてきました。しかし、それはあくまで人間同士の世界であって、女性を比喩的に動物に喩えて描かれることはあっても、人間と動物（あるいは魚）という形態でありませんでした。

ヘミングウェイはどうやら、愛の究極は自己愛を超えて、自己と他者の境界を消滅させることによって可能であり、それが理想だと考えていたように思われます。

では次に、『老人と海』の成り立ちについてお話しします。

ヘミングウェイは自分の船をもっていましたが、1938年以来、34年間、ヘミングウェイの生涯にわたって、その船の船長を務めたのはキューバ人のグレゴリオ・フエンテスでした。そのグレゴリオが今年の1月13日に亡くなり、日本でもニュースとして報道されました。朝日新聞ではグレゴリオ死亡記事［スクリーン上映（2002年1月15日付）］が掲載されましたが、一方、その前日の夕刊では小さな「素粒子」というコラム［スクリーン上映］に次のような記事が掲載されていました。

「私はあなたで、あなたは私だ」。『老人と海』のモデル、グレゴリオ・フエンテスさんはヘミングウェイのこの言葉を長く胸に刻んで生きたという。

『老人（と海）』が人を引きつけるのは、巨大なカジキやサメとの格闘がたったひとりであり、そのことが一筋縄ではいかない各（おのおの）の人生に重なって見えるからだ。

「ひとり」に成ってゆくのが成人なら保護者同伴や遊園地は向きが違う。役所が一律一様に集めるのも横並び社会的因習だ」

この記事は1月14日、成人式の前日ということもあり、たまたまグレゴリオが亡くなった時期と重なったので、成人式そのもののあり方と成人になるとはなにか、ということを説いた大変、いいタイミングで書かれた、なかなか味わいのある文です。

この最初の部分で「私はあなたで、あなたは私だ」というグレゴリオ・フエンテスの言葉が引用されていますが、これは正確には「私はお前で、お前は私だ」とか「おれは君で、君はおれだ」という訳にすべきだと思います。

私はグレゴリオ・フエンテスとのインタビューを二度行ったことがありますが、最初のインタビューは「ヘミングウェイの港——コヒマルにグレゴリオを訪ねて」と題して、文芸誌『新潮』(1992年3月号)に掲載されました。ここでは私は次のように書いています。

> ……グレゴリオはよどみなく話し続ける。1時間も過ぎたろうか。病み上がりのグレゴリオは一向に疲れた様子もない。インタビューの最後に、グレゴリオの心に一番強烈に残っているヘミングウェイの言葉を訊ねてみた。
>
> ——「私はおまえで、おまえは私だ」という言葉だ。おまえは私で、私はおまえ。これは二人が一体だ、ということだ」(243-44頁)

ここで私が何にこだわっているかと言いますと、実はグレゴリオはスペイン語で、次のように応えています。"Yo soy tu y tu eres me." 英語では I am you and you are me. という意味です。昔の英語は you と thee というふたつの言い方をもっていましたが、スペイン語では依然として、親しい間柄では相手を "tu" と呼びかけ、丁寧な言い方では "usted" というように呼びかけます。ですから、ヘミングウェイがグレゴリコに言った言葉は、他人行儀の丁寧語ではなく、親しみをこめて、人間同士が対等であるという意味を含めて、"tu" と呼びかけたところに深い意味があるのです。

ともあれ、このインタビューの最後にグレゴリオがさりげなく応えたヘミ

ングウェイの言葉は実に衝撃的であり、まさにそこにヘミングウェイの文学と人生が刻まれていることを、そのときに確信をもって、確認した瞬間でした。

ただし、グレゴリオ・フエンテスが『老人と海』の老人のモデルだという言い方は不正確でして、もともとのモデルは1936年にグレゴリオの前任者である船長が、たまたま海で出会った無名の漁師です。その老人は自分が釣り上げたカジキマグロを曳航している最中にサメに襲われて、魚の肉が食べられてしまい、大声で、半狂乱になって泣き叫んでいたという話を、この船長がヘミングウェイにしました。

それをエッセイとして、当時、雑誌『エスクワイア』に書きました。それから、15年の歳月を経て、さらにヘミングウェイ自身の釣りの体験が加わり、『老人と海』が生まれました。グレゴリオは直接的には『老人と海』の老人のモデルではありませんが、ヘミングウェイと一緒に海で過ごした体験が投影されていることは確かです。この実話に登場する老人とヘミングウェイが『老人と海』で描いた老人は似て非なる人物です。

では『老人と海』とは一体どのような物語なのか。このことに触れる前に、今から3年前、1999年がヘミングウェイ生誕100年にあたり、さまざまな催しが行われましたが、そのひとつに日本とカナダとロシアの3国で合作の映画『老人と海』が上映されました。この映画についてお話しします。

この映画は翌年の2000年3月、短編アニメーション部門でアカデミー賞が与えられました。また、このアニメーションにはヘミングウェイの人生がどのように『老人と海』を生み出すに至ったかをたどるドキュメント風の映画を前半におきました。この映画の制作にあたり、私がアカデミック・アドヴァイザーとして監修に関わりましたので、制作過程について簡単に説明をします。

プロデューサーたちが私に求めたことは、映画そのものを18分程度の短いものとして、できるだけ簡潔にヘミングウェイの人生を凝縮し、最晩年にいかに『老人と海』が生まれたのか、その源流と人生の軌跡をたどるにはど

うしたら可能か、という課題でした。

『老人と海』が書かれたのが1952年、ヘミングウェイ53歳のときですし、加えてノーベル文学賞受賞を経て、全生涯を描き出したいということでしたので、62年間の人生を映像によって18分で表現するということになります。そこで人生の大きな節目になるような事件や出来事に触れながら、『老人と海』のモチーフである、「釣り」とどう結びつけるか、ということを主眼に考えました。

映画は大まかに言いますと、次のような構成になっています。まず、ヘミングウェイの少年時代として、北ミシガンの別荘のあった周辺の森と湖、川、釣りの世界が映し出され、さらに高校時代に小説を書き出す場面を同じ森のシーンで描き、突然、第一次世界大戦の前線、イタリアのフォッサルタで爆撃を受けて重傷を負い、ミラノの病院での看護婦アグネス・フォン・クロスキーとの出会いに続きます。この女性は『武器よさらば』のヒロインのモデルとなった女性であり、ヘミングウェイの初恋の女性です。場面は戦後に移り、ヘミングウェイのパリ特派員時代から作家へ転身した時代、パンプローナでの闘牛観戦、さらにアフリカ、ケニアでのサファリ（これは実際には予算の関係で撮影はせず、記録写真で代用)、そしてキューバ時代の海で終わります。

これからドキュメント・タッチの伝記仕立ての映画「ヘミングウェイ・ポートレイト」と『老人と海』の一部をお見せしますが、その前に制作の打ち合わせの方法が映画でとても面白く使われていますが、ちょっと分かりにくいところもありますので簡単に説明をしておきます。

アニメーションの制作はすでに2年前にロシアから画家のアレクサンドル・ペトロフがカナダのトロントに居を移して仕事を進めており、ドキュメント映画の方はその後から追いかけるように作られました。

制作に関わった年、たまたま私は東京女子大学から1年間の研究休暇が与えられて、カリフォルニアのサン・ディエゴに滞在していました。そこで最

終的な状況では電話で意見交換をしたのですが、そのときに、カナダにはプロデユーサーやデレクターほか、映画製作のスタッフが一堂に会していて、こちらはひとりで電話を通じて質疑応答をするということを行いました。相手側はこちらの電話を部屋のスピーカーを通して全員で聞き、それぞれがマイクをもって、討論し、ときに質問をこちらに向けてさらに議論を重ねるという形で細部を詰めていくということをしました。

実はそのやり方が映画で、映し出された場面は大きく変えられていますが、実にうまく取り込まれております。要するに映画を作っていく状況そのものを映像化する、いわゆるメタ化（メタ・シアター、とかメタ・フィクションという意味の「メタ化」）するという手法を取っています。映画そのものが映画を作っていく過程を描くという方法です。

集めた伝記的な資料は膨大でしたし、制作前に行った議論の内容も実にさまざまなものでしたが、それらがともかく18分の中にびっしりと凝縮されていて、1回見ただけではほんの一部しか、映像としてとらえることはできません。映画を見る前に、2枚の釣りの写真を紹介しておきます。

舞台はまずアメリカ最南端の島、キーウエストのヘミングウェイの家から始まります。（そこに猫が1匹登場しますので、注意して見てください。）
では、しばらく映画をご覧ください。

［ビデオ「ポートレイト・ヘミングウェイ」を上映］

ひとりの人間のほぼ50年間をわずか18分の映像にまとめてしまうということ自体がかなり乱暴なことですが、映画の前に言いましたように、その50年の歳月を経て、『老人と海』がどのように生まれてきたのか、ということを少しでも見つけることができればいいと思います。

あまり時間がないので、先の表紙に使われた場面のあたりを少しだけアニメ『老人と海』で見てみます。

［ビデオ（映画の上映）アニメ『老人と海』］（2分）

『老人と海』では老人と少年が主な登場人物です。ふたりはそれぞれサンチャゴ、マノーリンという名前をもっていますが、実際には単に「老人」「少年」と呼ばれることがほとんどです。登場人物はこのふたりを除いてほとんどいません。登場する多くはカジキマグロ、サメに加えて、ライオン、飛び魚、軍艦鳥、小鳥、しいら、かつおのえぼしのような動物や魚であり、海とか空、雲、星、月、太陽のような宇宙の一部が自然の存在物として、人間や動物と並んで対等に存在しています。

それが対等であるのは、もちろん老人の眼差しを通して実在しているからです。それが老人のものの見方であり、宇宙観であり、人生観でもあります。創造主の庇護と支配の下で、宇宙の万物はすべて対等に存在し、人間も動物も自然界も宇宙そのものも同次元で、その存在が認識されているというのは、老人の素朴な形而上学的な独白によってわかります。

老人は巨大なカジキマグロが餌に食らいつき、ときを共に過ごしますが、そのときには次のような台詞を言います。

「この魚だってわしの友だちだ」老人は声を出して言った。「こんな偉大な魚は見たことも聞いたこともない。だが、わしは殺さなければならない。星を殺さなくていいのはありがたいことだ。考えてみるがいい、もし、毎日、月を殺さなければならないとしたら、と彼は思った。月は逃げてしまうだろう……」。(75)

ヘミングウェイにとって、結果として、この『老人と海』が生前、最後の小説となりました。死後にこれまで3冊の長編小説と1冊の短編集が遺作として出版されましたが、いずれも未完の作品です。『老人と海』を書き上げてしまった後で、この作品があまりに完成度の高い小説であったがために、生前、それを超える小説が書けずに、未完で終わってしまったのかもしれません。

さて、最初の謎、『老人と海』の中に唐突に猫を登場させたのは何故か、という謎について簡単に考えを述べます。実はこの猫の存在を理解するには、さらに別の存在に目を向けなければなりません。

"Tiburon," the waiter said. "Eshark." He was meaning to explain what had happened.

"I didn't know sharks had such handsome, beautifully formed tails."

"I didn't either," her male companion said. (127)

『老人と海』のほとんど最終の場面にアメリカからやって来た若い男女が登場します。アメリカからやって来たふたりの男女が、老人が釣り上げたマカジキの骨と頭だけの残骸が小舟にくくりつけられている様子を見て、レストランのボーイに尋ねる場面です。あまり英語のうまく話せないボーイが、「サメが……」とスペイン語で言いかけて、なまりの強い英語で、言い直し、言葉を詰まらせると、このアメリカ人は早とちりして、「サメがあんな立派できれいな尾をしているとは知らなかった」と、誤解する場面が書かれています。出版された当初、この場面は不必要だと批判した批評家は少なくありませんでしたし、今もそう思っている批評家や読者がいると思います。しかし、実はこの脳天気なアメリカの若者が最後に登場するのは、この作品にさらに新たな重要な意味を加えていると私は考えています。

このアメリカからの旅行者はひょっこりとキューバに観光にやって来て、コヒマルという貧しい村の港で、ひとりの漁師が生死を賭けて闘った末に、ようやく港にたどり着いたという、われわれ読者が共有してきた体験の意味を理解することもできないし、その機会も与えられていない人物であり、いわばまったくの部外者、異邦人として存在しているのです。ただ偶然、そこで結果だけを目にしているだけで、そこに至る過程も状況も、まして老人の形而上的な宇宙観、人生観も理解できていない者として大いにその存在に意味があるのです。

これは端的には近現代の小説や演劇でよく見られる、いわゆる「異化作用」を行う存在でもあります。あるいはもっと広い視点で言えば、道化的な人物に似た存在である、深刻な場面や悲劇的な状況を異化することによって笑劇（笑いの喜劇）に転じてしまう役割を担った存在です。『老人と海』の老人の英知と悟りに対して、読者がそのままそれを直に納得し、また老人の悲劇的な結末に読者が無批判に陥らないように、作者は最後に障壁を置くことによって、読者の安易な感情移入を拒み、より冷静で、複眼的な視点でものを眺めるよう異物をここに登場させているのです。

状況をまったく理解できないアメリカ人の存在と、一方に、丘の上で倒れているイエス・キリストに似た老人の前をして、人間界のことなどには無関心で、また老人の存在そのものを無視するように通り過ぎていく一匹の猫の存在、それぞれ役割は異なりますが、これらは状況の外から眺める視点を読者に知らしめます。それは海での物語の展開が主として老人の独白と内的独白に近い形で、老人の視点から多くが語られていたのに対して、ひとたび陸に上がると、視点が老人から離れて、主体であった老人が客体化され、外側から眺められるという視点の反転がなされているからでもあります。その視点とは、かたや状況を理解できない者の存在としてふたりのアメリカ人であり、かたや老人そのものの存在をも認めない者としての猫、ということになります。老人がゴルゴダの丘を登るキリストと重なることから生まれる崇高で厳粛な存在そのものが、猫によって無視されるのは、猫はそうした比喩的な意味も理解していないからでもあり、そもそも老人がそこにいることも気付かずにいるからでもあります。もちろん、老人が３日３晩、死闘を展開したあげくにとらえたマカジキのことも知り得ません。その意味で、猫とふたりのアメリカ人は共通しています。そもそもこの小説は「登場人物」が極めて限られており、そうした状況で結末においてこの猫とふたりの男女が唐突に新たに登場することにより、この両者の存在が大きなインパクトをもつことになります。

さらに、マカジキを鮫と取り違えてしまうふたりが「アメリカ人」である

ところにイデオロギー上、深い意味をもっているように思われます。もちろん、地元キューバの漁民や村人は、このふたつの異なる魚を混同してしまうことはありえません。ふたりの男女が誤解をするのは、ひとつにスペイン語を解さず、外国人としての言語的なハンディを負っている、あるいはスペイン語も知らずに英語で押し通そうとする、いかにもアメリカ人らしい帝国主義的あるいは植民地主義的な傲慢さに起因しています。このふたりが無知な観光客であるという事実以上に重要な点は、彼らが「アメリカ人」であるという点です。アメリカ人はキューバをあたかも属国のように考え、あるいはフロリダと海を隔てたアメリカのリゾート地の延長のごとき意識を長く持ち続けてきました。事実、この作品が書かれた1950年代、キューバの首都、ハバナにはアメリカのマフィアが支配する歓楽とギャンブルの暗黒社会が存在していたし、バチスタ政権は貧富の格差が大きい社会にあって、一部の富裕階層の支持とアメリカ政府の支援によって成り立っていました。1940年代以来、ヘミングウェイはキューバに居を構え、自ら「キューバ人」であることを自認していたと同時に、バチスタ政府とそれを支援するアメリカ政府に対しては、密かに批判的でした。

後にカストロ政権が樹立した1961年、その革命政府を即座に支持したことからも明らかなように、終始一貫してヘミングウェイはキューバの大衆の側にあり、アメリカ政府への批判は変わることはありませんでした。したがって、『老人と海』に現れるアメリカ人の旅行者は、この小説においては実に重要な役割を演じているのです。まさにこのふたりは単なるアメリカ人にとどまらず、キューバに対する無理解な「アメリカ」そのものとして、象徴的な存在として、なくてはならない人物です。猫の存在がまずあり、その延長線上でふたりのアメリカ人の言動の背後に潜む意味を考えてみると、寓話的な物語の背後に、政治的な背景を読み解くことが可能となります。アメリカ人でありながら、30年間という人生の半分をキューバに生きたヘミングウェイが、いかなる思想を内に秘め、アメリカ批判を行ってきたか、ここに見ることができます[3)]。

注

1) この猫に関しては，キューバの自宅（現ヘミングウェイ博物館）の50余匹の猫およびキーウエストの自宅（現ヘミングウェイ博物館）に現在は60匹を上限として，ヘミングウェイの猫の末裔が居ることと併せて，『ヘミングウェイと猫と女たち』（今村楯夫著，新潮社，1990年）で詳しく論じた．
2) Backman, Melvin. "Hemingway: The Matador and the Crucified." *Ernest Hemingway: Critiques of Four Major Novels.* Ed. By Carlos Baker. New York: Scribners, 1962. 135–143. で詳しくサンチャゴ老人とイエスとの重ねに関して論じられている．また，Shaw, Samuel. *Ernest Hemingway.* New York: Frederick Ungar, 1973. では次のように論じている．"When, his [Santiago's] ordeal over, the old man lies down on his bed, it is as Christ crucified." (117) と，老人がベッドで横たわっている姿そのものをキリストの十字架に架けられた姿と重ねてみている．
3) 長く国家安全保障上の機密事項として，アメリカ政府機関FBIによって非公開だったFBI Files: Ernest Hemingwayが公開され，1942年以降，1961年の死後も10年以上，情報は補足され，30余年間にわたる調査ファイルの内容が明らかにされた．ファイルは127頁の詳細な文書内容であるが，依然としてかなりの部分が黒塗りなまま極秘扱いとなっている．（参照：柴山哲也著『ヘミングウェイはなぜ死んだか』集英社，1999年，30–31頁．）なお，インターネット"G-Files Report"の"Summary"には以下のような文がある．"And all the while, FBI Director J. Edgar Hoover's men were paying close attention to any ties that Hemingway had with communists." 15 March 2002. 〈http://www.apbaline.com/media/gfiles/Hemingway/〉. FBIの関心事は明らかにヘミングウェイと共産主義（者）との関係にあった．キューバは1961年にフィデル・カストロによって共産主義国家として新生し，アメリカと以後，国交を断絶したままである．

Text

Hemingway, Ernest. *The Old Man and the Sea.* New York: Scribners, 1952.